会津の歴史シリーズ



第4回 会津の歴史③ (上杉時代)

中間 進 (なかおか すすむ)

若松城天守閣郷土博物館 副館長·学芸員



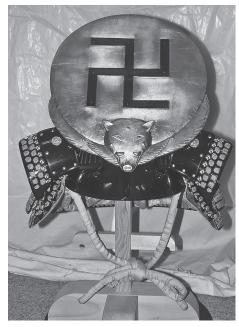
◆上杉景勝、120万石領主として会津へ

豊臣秀吉は、1598年2月に蒲生秀行を宇都宮へ 移し、代わりに越後の上杉景勝を会津の領主とし た。このころの全国的な勢力図といえば、天下 人の秀吉に待望の世継ぎ(秀頼)が生まれたた め、養子に迎えられていた秀次は死に追いやら れ、次期天下人は秀頼に決まったようなものだっ た。ただ、まだ幼児であるため、一人前になるま では後見役としての秀吉の存在が必要だった。し かし秀吉は約半年後に没してしまう。豊臣家とし ては、秀吉に代わる後見役が求められ、通常なら TH三成がこれを果たすはずだったが、残念なが ら人望が無く、秀吉がいなければ三成に従う者は 意外に少なかったのである。いや、その言い方は 正しくはない。秀吉に冷遇されていると感じてい た大名たちの不満の受け皿として、すでに動き始 めていた徳川家康によって反豊臣、反三成の多数 派工作が進んでいたのだった。そして、秀吉が存 命中であるのにもかかわらず、反感を招く決定打 となったのが朝鮮出兵であった。第1回の対縁の

後(1592~93)により多額の出費を強いられた各大名たちに対し、再び朝鮮へ向けて出陣するように秀吉から命じられたのが第2回の慶長の役(1597~98)である。すでに死期が近い秀吉に代



上杉景勝像 (米沢市上杉博物館蔵)



上杉景勝所用兜(摸本)(若松城天守閣郷土博物館蔵)原資料:鉄黒漆塗紺糸咸異製最上胴具足(新潟県歴史博物館蔵)

わり、実質的に指揮をとった三成への反感は膨れ上がった。結果として何の成果もないままに秀吉が没したため、朝鮮出兵は中止となった。

こうした経緯を踏まえ、国元に帰った各大名に対して家康は大量の書簡を送った。そこには、現体制の継続による不遇がさらに積み重ねられることと、それに代わる新たな体制を築くことによってさまざまな弊害が解消されることが説かれていた。この時はまだ家康においても豊臣家臣である五大老の一人に過ぎないため、主君に弓を引くようなことが知れてはまずいと、秘密裡に進められたのである。もちろん五大老に名を連ねる会津の景勝や加賀の前田利長などは、秀吉への忠誠心が厚いと思われていたので、こうしたところへは家康の工作は為されなかったが、仙台の伊達政宗など東国の大名たちは、多くが家康支持に回っていた。そしてそれは西国へも浸透していったのである。

◆神指 城 築城から直江状、そして関ヶ原へ

秀吉の死から1年以上が経過した1600年春、景

勝は会津において新しく城を造ることに着手した。 その当時の鶴ヶ城は、120万石の大大名の居城と しては狭いことや、東側に山並みが連なることが 鶴ヶ城の防衛上好ましくないことなどが考えられ ていた。さらに戦闘の規模が大きくなってくるに つれて、危急の際に大量の物資を輸送するには船 運が必須であるため、阿賀川沿いの神指ヶ原に築 城することとし、直江兼続にその指揮を任せた。 当時京都にいてこれを知った家康は、新城の築城 は戦闘の準備であり、いうまでもなく家康への敵 対心の表れであるから、すぐに中止するよう命じ た。しかし上杉家としては、家康に命令される立 場ではないこと、さらにはともに豊臣家の家臣で ありながら、豊臣家を差し置いて自分が天下人で あるかのような振る舞いをする家康こそが、国内 を混乱させようとする原因になっているという書 簡を返したのだった。直江兼続の名前で出された この手紙は「直江状」と呼ばれ、これに激怒した 家康は会津を討伐することを決意し、出陣の準備 を整えると、会津へ向けて出発。これを受けて上 杉側も築城を中止し、家康軍を迎え撃つべく国境 の白河に兵を送り備えた。

京都から会津へ向かっていた家康軍は、江戸まで来るとそこで1か月ほど滞在する。この間に直 江兼続と通じていた石田三成は、家康が京都を離れたことを確認すると、留守を任された鳥居氏を



現在の神指城跡遠景

急襲して倒したのだった。家康軍は江戸を出発して会津へと向かうが、途中で三成挙兵の知らせを受けると、下野国小山で「小山評 定」といわれる会議を開き、京都へ引き返すことを決定した。

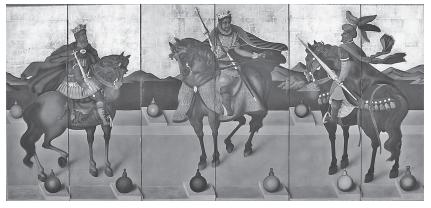
当時、家康の立場はまだ江戸を領地とする一大名に過ぎず、京都まで戻るには他の大名の領地を通過するため、各領主に対して許可を求めなければならなかった。しかし掛前城主だった山内一豊が、家康に対して自分の領地を自由に通過してかまわないと申し出ると、東海道の各大名もこれにならった。家康の書簡による事前工作が実を結んだのだった。これにより一気に東海道を通過した家康軍は関ヶ原で三成率いる豊臣勢と衝突。数的に拮抗していたと思われたが、小草川秀秋の寝返りによって急展開を見せ、家康軍の一方的な勝利に終わった。

会津の上杉景勝はというと、小山から家康たちが引き返したことを聞き、これを追って家康軍を討つべしという意見も出る中、景勝は「背後から襲うのは戦う上では卑怯なこと。上杉家の戦いとは、正々堂々とあるべし。」として追うことをせず、逆に北上して伊達政宗・最上義光の軍勢と戦うこととした。激しい戦闘が繰り広げられたが、関ケ原での三成敗れるの報が届くと、もはや戦う意味が無いとして、参戦していた前田慶次郎をしんがりに据えて撤退したのだった。

◆蒲生秀行、再び会津へ

翌年、徳川家康はそれぞれの働きに応じて大名の改易を行い、戦闘のきっかけとなった上杉景勝は会津120万石から米沢30万石への減封が命じられた。御家断絶も考えられたが、直江兼続が奔走してなんとか減封となったのである。そして会津へは、宇都宮にいた蒲生秀行が返り咲くこととなった。今回の戦いにおいてさほど働きがあったわけではなかったが、家康の娘婿、さらには織田信長の娘の子というところが配慮されてのことと思われる。

さてこの秀行であるが、記録ではあまりいい城主ではなかったと思われる。柳津の川で漁をした際には、大量の毒を投げ入れて魚を死滅させたことなどである。そして城主となって10年後には直下型の地震により領地には大きな被害があった。会津盆地の北部では、川がせき止められて多くの集落が水没し、城においても石垣が崩れ天守が傾いたと書かれている。そんな災害があった1か月後に、探検家のセバスチャン=ビスカイノが秀行を訪ねて会津に来ている。徳川幕府がキリスト教への取り締まりが厳しくなったことへの打開策として、高名なキリシタン大名だった蒲生氏郷の子である秀行のもとを訪れたのだろう。このとき「泰西王侯騎馬図」が秀行に贈られたと考えられており、以後城内で保管され続けたのだった。



鶴ヶ城に伝えられた「泰西王侯騎馬図屏風(静図)」の模本(若松城天守閣郷土博物館蔵)